
ディフェレント・ワールド

閑古鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディフェレント・ワールド

【Nコード】

N7463X

【作者名】

閑古鳥

【あらすじ】

アザミトウヤ

昉透哉は受験生である。受験勉強をそろそろ本気でしなければ間に合わないであろう時期に突然透哉の運命を変える大厄災が降りかかる。

身内や友人を亡くした透哉の前に現れたのは一匹の黒猫だった

1* 始まりの事件

筋透哉は受験生である。クラス順位で中の下と言った微妙な位置に常に停滞している。

そんな透哉は窓際の後方の座席に座り毛髪が足りない代わりに無駄に多い脂肪をゆさゆさと揺らしながら二次方程について熱く語っている数学教師を横目で眺めながら窓の外を見つめていた。

「…？」一瞬、空が光ったような気がした。眩しさに眼の奥が痛くなり目を瞑る。数秒後、辺りを見回すが誰も気にした風はないうつもどろりにつまらない授業が続いている。

気のせいだと思い、教師の話すことに耳を傾けると、視界の端の窓がドーム状に膨らんだ。

「?!」

驚きのあまり窓の方を凝視すると同時にすべての窓ガラスが砕け散る。

聞こえたのは頭上から何かが崩れる音と誰ともわからない甲高い悲鳴だった。

？

気が付いたとき、一番最初に目に入ったのは手を伸ばせば届く距離にある天井だった。

「は……？」

茫然と辺りを見回した。床自体が傾き天井の高さが場所によって高くなったり低くなったりしている。授業中だったはずの教室には机や椅子などの残骸はなく人がいたという跡形さえなくなっていた。

「聲…、砺波…？」

仲の良い友人の名前を呼び掛けてみる物の返事はなくむなしく反響

する。錯乱し始め闇雲に動く。運が良かったのか透哉の周囲だけは何事も無かったようで少々額を切った程度だ。行動範囲は意外に広くなるとか建物の外に出れた。

街の中でも都会の方であった学校周辺は、まるで巨人が通った後であるかのように建物がすべて潰れてなくなっていた。

「…なんだ、これ…」地震か津波の被害にあったかのような豹変だった。家は傾き、潰れ、周囲は酷く見晴らしがよくなっている。

ふと、家は大丈夫だろうかという不安に駆られた。学校から家はおよそ200メートル。下手をすれば家まで同じようなことになっているかもしれない。勢いよく走り出す。息切れを起こし始めたあたりで本来家があったはずの場所へ着いた。

家は無かった。真上から押しつぶされた様に天井が家の正面に立つ透哉の足元にある。

「嘘だろ…」

腰の力が抜け、その場に座り込む。何の感慨もわかず、まだどこかで夢だと思いたい自分がいた。

ふと顔を上げると、低くなった屋根のてっぺんでこちらを見つめる一匹の黒猫がいた。こちらも猫に気が付くと猫は透哉の足元までより、透哉の正面で腰を下ろした。

「お前の家族はいなくなっただ」

どこからか小さな濁声が聞こえた。誰が誰に言ったんだろう、遠いところで考えていると猫がこちらを凝視した。

「お前に言ってるんだ透哉。それとお前の友達たちも」

「?!」

驚きと恐怖に突き動かされ、腕の力で後ろへ這い下がる。猫は透哉の反応を一瞥し（猫のくせに）溜息をついた。それから、

「お前の大切なものを取り返したいか？」

真摯な声で、問う。透哉は数秒だまり、それから小さくうなずい

た。

「来い」黒猫はそれだけ伝えるとさっさと踵を返して進み始めてしまった。足を一度叩いて気合を入れ直し猫の後を追う。猫は数メートル先でこちらを向いて早く来いとでもいうように尻尾を揺らし、こちらが追いつくと再び前を向いて走り出した。

「ちょ、待てってっ」

呼び止めるが黒猫は知らん顔で足を止めることは無い。そのまま猫は瓦礫の上をひよいと飛び越え、被害を免れたほうへと足を進める。どうせ答えてくれないようなので無言で後を追いつけると黒猫は今後もう使われていない工場跡地にたどり着いた。

2＊冒険の始まり

尻尾をゆらゆら振りながら猫は無言で扉に入っていこうとするので、「おい！」思い切って呼びかけた。

「…うつせえな、早く来いよ」

黒猫は面倒くさそうに振り向き疲れたように言い放つ。なんなんだ猫のくせに癪に障る動作だな。

「なんなんだよ…お前。なんで猫のくせに喋るんだよ、僕を連れて行ってどうするんだよ…」

「行かないのか？」

「…」

こちらの質問には答えずに猫は問い返す。表情のない声で一言。

「取り返したくないのか？家族、友達…、ああ、あとお前の想い人とか」

「…」

凶星だった。透哉の家の隣に住んでいる幼馴染で密かに想っている鹿山美奈も、消えていた。

思わず黒猫を凝視すると黒猫は鼻で笑うように尻尾を揺らす。

「俺について来ればなんとかなるかもしれんぞ」

猫はふたたび扉の方を向いて一步步み出た。扉は勝手に開き、その奥は真っ白な、しかし眩しく無くどこか懐かしい光が満たされていた。

「別に来たくないなら来なくてもいいが…。それはそれで大変だぞ」
「どういう意味だよ…」

黒猫はその問いには答えずに扉の中に足を踏み入れた。ここで置いて行かれては困る（主に帰り道が分からない）ので、仕方がなく黒猫に続き扉の中に入った

？

とにかく真つ白な空間で、ただ無言で猫についていく。突然猫が振り返り、

「俺を抱えろ」

「…は？」

何を言い出すんだこの猫は。

「向こうに着いたときに俺とはぐれたら、多分お前死ぬぞ」

猫といたって変わらないだろうと思いつつも言われた通りに抱きかかえた。

「そのまままっすぐ行け。もうすぐ着く」

「はいはい」注文多いなあ。

足が疲れてきたところに光は徐々に薄くなり景色が見え始めた。

「…え？」

想像していたのと全く違い拍子抜けした。赤茶色の砂漠が地の果てまで広がり、ところどころに砂丘を突き出た大きな岩が目立つ荒野のど真ん中だった。

「ノロマ」

低くドスの利いた男の声が背後からした。勢いよく振り向くとそこには、荒野には全く似合わない全身真つ黒の男がいた。それは比喻なんかではなく本当に黒いのだ。

黒のロングコートから覗く足は黒のズボンで覆われ勿論黒のローファだ。黒のハットに天然だと思われるパーマも真つ黒でしかし肌は異様に白く浮き上がって見える。

街で見かければ上級の紳士が何かに見えるだろうがこんなところで見かければただの場違いの男にしか見えない。

「足おっせえ」

「…悪かったな」

不貞腐れたように足元を睨みばやく。

「ま、とりあえず、生き残れよ」

「…は？」

黒猫に案内された世界はおかしなところだった…。

3＊異世界のルール

「…お前、誰だ?!」

飛ぶ勢いで距離を取り思わず身構える。はぁ?と言わんばかりに訝しげにこちらを睨めつけられた。心もち肩を縮こまらせ上目で男を見る。

「さつきからいただろ、ばーか」

「知らねえよさつきまでいたのは黒猫…て、お前がさつきの黒猫?!」

「だーから言っただろお前は真正の馬鹿か何か?」

男は苛々したようにコートのポケットからタバコを取り出し口角にひっかけ火をつける。一連の動作を慣れた作業で行いライターをポケットに突っ込んだ。

「さつきからお前って…、僕の名前は」「名乗るなよ」

男は言うことを遮りくぎを刺す。

「はあ?」

「お前に言っただけどこつちに来るにはルールが二つある。守れねえとお前は元に戻れなくなるから気をつけるよ」

「…はあ」

割かし卑怯な返事をして微妙にうなづく。

「一つ目は異世界に行くときは誰かに手引きしてもらうこと。そーじゃねえと姿かたちが変わる。あー因みに元居たところに戻るときは別に手引きする必要はない。で、もう一つが異世界では真名を名乗らねえこと。言ってしまったら、元居たところの記憶はなくなる。で、両方破った場合はもう戻れなくなるからな」

「あー…だからアンタは猫に…」

頷きつつ、もしこの男の体が大きければ黒の象だったのかもしれないと笑いそうになりチラリと横目で見ると睨まれたので視線をつま先に落とした。

「お前、ハクって名乗れよ」

「は？なんで」

男は口角に煙草をひっかけたまま人差し指をハクの顔の前に突き出した。

「影が薄い」

「うつせええええ！！」

「因みに俺はルネルト。さんつけねえと返事しねえからな」

「うつせええええ！！」

ルネルトを睨みつけ同じノリで怒鳴る。しかしルネルトは何処吹く風と言った涼しい顔で地平線の彼方を見つめた。

「でー、お前をここに連れてきた理由だけど」

かみ合っていない問答の末、ルネルトが突如切り出した。

「お前の周囲の人間を奪ったのはこの世界のトップの奴。ソイツを殺して世界の摂理を変えれば戻る」

「こ…殺す…？」

「殺せ。言つたら。ここはお前のいた世界じゃない。人殺しなんざ罪に問われねえ。…ま、国のトップとなりゃ下手したら死刑かもしれないが」

「駄目じゃねえかよ」

大げさに肩を落として大きなため息を吐く。

「まあ聞けつて。奴は定期的にお前のいた世界から多数の人間を無理やりこちらに連れてくんだ。こつちの国の繁栄のためにな。だが時々お前みたいに置き去りにされる奴もいる。お前には他と違う力があるんだ」

漫画のような話をしだすがルネルトは至って真面目な表情のままで遠くを見据えたまま話す。荒野には乾燥した風が異常に冷たく肌を撫でた。

「こつちにはトップを殺すことはできないが、お前のように命令に逆らえる奴は奴を殺すこともできる。そうすれば、お前の大事な奴は元に戻ってお前も帰れるんだ」

「……」

考え込むハク。本当に頂点を殺せばみんなが戻ってくるのだろうか。この男を信用していいのかさえ分からないのになぜこの男は俺にだけそんな事を言うのだろうか。

ハクの考えを読んだらしいルネルトだが、鋭い目つきでハクを一瞥しただけで話し続けた。

「するかしないかはお前の自由だが……俺はもうお前のいた世界に行く気はないから今俺に逆らって帰れば助太刀しねえからな」

「……やればいいんだろやれば。それに俺帰り方知らないし」

「はっ、素直じゃねえ餓鬼。ホントは一人で戻ったって寂しいからだろ？」

「うつせーってば！さっさと移動するぞルネルト！」

「……」

呼び捨てにしたら本当に返事しなかった。

「行くよルネルト……さん」

「さん」だけ心持小さく呟くと「聞こえねえー」「……」苛々してきた。

「早くいくぞルネルトさん！」

半ば投げやりに叫ぶと煙草を咥えながら目を伏せ鼻で笑った。

「それでよし」

「……」

うぜえこのおっさん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7463x/>

ディフェレント・ワールド

2011年11月5日14時18分発行